

各期同期会の活動状況

■中41回

この年齢になると、会員の漸減はどうにも防ぎようがない。一昨年の例会の折り、来年からどうしようかという思いは、誰しもの胸の内に無いではなかった。しかし、誰だっただか、「いいじゃないか。出来る限り続けよう」という発言に、一人の異存もなく、継続と決まった。

ただ長年の会場が銀座8丁目から1丁目に変わった。自ら世話役を買って出た森谷要君の馴染みの「がんこ」という小才の利いた店が定席となった。そして10月の第3土曜日が定例日と決められた。

平成20年は11月15日の土曜日だったが、8名が集まり、翌年（平成21年）からは、定例日の再会を約して散った。名簿の上では21名の在籍だ

が、病気や遠隔地などの理由が出席を阻んでいる。しかし、2度とない、また今後、年毎に減る貴重なチャンスを逃さずに、顔を見せて欲しい。

（林 京平記）

■中46回

昨年9月8日の夜、日本のマチュピチュ（と勝手に称す）飯田市上村のしらびそ高原ホテル「ハイランドしらびそ」



（標高1900メートル）で、満天の星空のもと、校歌「赤石山は……」を放吟する一団がありました。飯中46期の飯田と首都圏有志合同懇親会のメンバーでした。その年の5月13日、東京市ヶ谷での定例同期会で話題になり、実現したものです。

遠路にも拘らず参集したのは、地元飯田6名、首都圏3名、名古屋1名の計10名でした。申すまでもなく、私たちは昭和17年の入学から同23年の卒業まで、学生生活の大半を大東亜戦争遂行の名のもとに、集団労働に狩り出され、学業は副次的に行われると言ってもよい程の状態でした。それだけに、懇親会での話題は尽きることを知らず、深更にまで及ぶ盛会となりました。

翌日は霜月祭伝承館などを見学し、次回への参加を誓い

合って解散しました。

そして今年も、5月13日の定例同期会で、10月下旬に生田近辺で松茸料理を楽しもうという話になって具体化されつつあります。（桑原忠三記）

■中47回・高1回

老いの影。自然の摂理と甘受すべきか。出席ついに40名を割ってしまった。恒例4月第1土曜日開催の東京47会が開關以来初めて直面した厳しい現実である。

それはともかく、出席者は老いの影など払拭して、悠々ピンピン健康を謳歌している（ふりをしてい）つわもの揃い。当番司会の指示により、物故者へ敬虔なる黙祷をささげた。

そこには我ら47期生に格別忘れ難い英語恩師「ダッシュ」こと長谷川清先生が、前年10



月16日、100歳の高齢で逝去という報告もあったから、黙祷は普段よりもかなり念入りだった筈である。

我ら47期生がダツシユの猛烈なしほりを受けるようになったのは戦後の3年間、おまけに新制度によるホームルームとか学年主任とか、英語に限らず素行に至るまで、ダツシユ先生のお世話になった。正真正銘の恩師である。そして我ら47期生の卒業とともに、先生は郷里岡山へと転任されたのだった。岡山での活躍と話題は知る人ぞ知る。

飯田での最後の教え子であ

る我々が、長谷川ダツシユの随想隨筆集『実る稲穂の 反骨英語教師50年』を編集発刊したのは平成6年。先生は85歳で嬰鏢、熱い心の贈り物として大変喜んでくださった思い出が残る。(牧内雪彦記)

■中48回・高2回

60年前、海も見たことがなく、エレベーターも知らないうちまま上京した戦中・戦後派。未曾有の就職難を突破し、夫々の道で日本を引っ張ってきた我ら高2回生。

ほとんどの者が現役を退いた今、年1回集まって語り合おうと「ほんとうにマスコミの知らない凄い話が飛び交う」仲間である。

そんなわけで、我ら高2グループは、4、5年前より「その道のプロの貴重な話を聞くことにしようじゃないか」ということになり、元日経BP

社社長・日本格付投資情報センター社長の鈴木隆君を皮切りに、日本癌学会名誉会員の岩口孝雄君、元朝日新聞編集委員・「週刊金曜日」編集委員の本多勝一君、農林水産技術情報協会名誉会長の西尾敏彦君と、毎年その道の立役者の隠れたエピソードを聞いて感動している。

来年4月3日には、元地方財政審議会会長の林健久君にやってもらうことにしており、まだまだ続けていきたいと願っている。参会者も年々増えてきている。

金属疲労に陥ってしまった日本の政治を見るにつけ、このまま若い者に任せておいて良いのか心配で心配で、まだまだ隠居はできないなど、血気盛んな高2回生である。

(小島 敞記)

■高3回

高3回卒は、昭和7年生ま

れが4分の3を占めるため、本年は「喜寿」の記念の会を、5月16日の昼間、アルカディア市ヶ谷(私学会館)で開催。特に女性2名の参加があり、39名の出席。

開会に先立って物故者の追悼。昨秋、当会創立時より常任幹事をされた中島功雄君が逝去され、他の同期生を合わせて6名の方々のありし日を偲び、ご冥福を祈って黙祷を捧ぐ。中島夫人のご挨拶を頂



く。一部幹事交代の案件を済し、記念写真後、特別セレモニーへと移る。

会唯一の音楽家・岡井洋人君の音楽仲間的女性2名の特別出演によるピアノ伴奏とソプラノの美声と、岡井君のテノールとの懐かしの日本歌曲コンサートの催され、故郷の歌を全員で合唱し、大好評であった。また、鈴木達雄君の好意によって、西陣織による般若心経が出席者全員に提供された。

宴酣の中、当会随一の若さと声量の持主である原田善君の首頭により、「信濃の国」・応援歌・校歌斉唱と、宴は最高に盛り上がり、来年の再会を約して散会となった。

(江添繁和記)

■高4回

「風は愛と光とやさしさで

運ばれ そして

仲間たちの耳元で囁く」

第46回の定例27会は、5月の第3土曜日、新宿三平に60名の仲間が参集して開催された。

今回は例年と異なり、重要な2つの案件の可決があった。

その1は、長年運用してきた弔慰金制度を解消して、出資者(当時2万円)に一律2万7千円の返還を決めた。

元気なうちに返して有意義に……と云う趣旨もあるが、長年基金運用に尽力してくれていた会計担当の西澤正夫氏が不測の病に倒れ、余人では代えがたい事情もあった。

その2は、次回(第47回)から会費を3千円とし、足りない分は毎期毎に貯えてきた剰余金を充当し、第50回までに全額を使い切ることで衆議一決された。

年金生活に入っている仲間にとつては、思わぬ朗報に大喜びでしたが、資金運用に多大な貢献をしてくれた西澤氏へは、謝意と病の快方を願う

メッセージが数多く寄せられ、本人のもとに届けられた。来年の第47回の開催は、5月の第3土曜日ですが、開会時間が1時間繰り上がって、午後1時からとなりますので、要注意！(福澤里次記)

■高5回

我々、高校5回生の卒業55周年記念全国大会は去る11月29日、アルカディア市ヶ谷(私学会館)で行われた。当日は遠く北海道や関西からの参加者を含め、69名の参加であった。受付開始時刻ころから続々と到着し、ロビーで「はあるかぶり」の再会を喜ぶ声がありました。

司会の仲間良仁君が開会を宣言、代表幹事の久保田實から開会の挨拶と「下伊那地方の苗字」「三種の神器」(我々の高校時代の三種の神器は腰の手拭・朴歯の高下駄・学生

帽であった)について短い話があり、最後に今後の会をもう少し間隔を短くして開催できないか、そのために準備委員会を次回幹事の飯田地区が中心となつて検討してはどうか、との提案があった。次いですでに63名に達した物故者を追悼する黙祷。

午後5時20分開宴。どのテーブルも高校時代の話題で盛り上がった。テーブルからテーブルへと渡り歩き、「あの時どうした」「かの時こんなだった」と、お互いの昔を懐かしむ声で会場は喧騒を極め、時間の経過とともに盛り上がっていった。

(久保田實記)

■高7回

「首都圏高七会」(西村清一会長)は、30年前に発足し、現在はメンバー1100名強、毎年2月の第3金曜日の夜に総会を開催していたが、昨年

■高10回

4月4日(土)、東京では遅れ気味の桜が満開となつて、快晴の週末で賑わう表参道の南青山会館にて、恒例の十松会(関東)を開催。淵井先生や在郷同期会幹事をはじめ、九州や北陸からも遠来の諸君の参加を得て、総勢59名の大盛会となりました。

会場正面には「十松会 祝古稀」の書を掲げ、お互いの健康を祝し、昨秋昼神温泉で開催された卒業50周年記念大会から引き続き続いた熱気に終始包まれました。飯田の早い桜便りに始まり、紅顔可憐な時代の写真や思ひ出話、近況報告やらと、あつと言う間の2時間半となりました。

酒量・弁舌衰えを知らず、古稀を目前に益々元氣溢れ、まだ明るい通りに2次会、3次会へと流れた猛者も多くいたとか。また近いうちに再会

陸会が6月17日に行われました。ここ数年はNHK青山荘を会場としておりましたが、たまには気張つてということ、帝国ホテル(蘭の間)で、41名参加のもと、盛大に催されました。

出席メンバーが固定しつつある中、久々出席の数人の顔



から「我々も年をとつたからもつと暖かい時にやるようにしたい」との声により、4月の土曜日・昼の開催に改めた。今年の総会は4月11日にアルカディア市ヶ谷(私学大会館)で行い、40名が出席。今秋(10月)に首都圏高七会が主催して行う「飯田高松高校卒業50周年記念大会」及び「55周年記念誌」発行などの案件を承認した。また、ご健在な恩師のご出席もお願いし、盛大な催しにするよう実行委員会を設け、準備を進めている。なお、高7回の集まりは、飯田下伊那地区の「在郷高七会」(会員64名)及び「高七会中京地区在住者懇親会」(28名)があり、それぞれ総会や懇親会を開いている。

(金田明夫記)

■高8回

八松会関東支部の総会・親

が見られたことは喜びでした。

物故者を悼んでの黙禱から始まり、酒宴もたけなわとなると、お互いの近況報告、情報交換、さらに懐かしい思ひ出話へと、会は盛り上がりました。

同ホテルの別室で行った2次会には、何と1次会出席者の6割の人が出席し、話は尽きませんでした。

定例のゴルフ大会は、今秋また予定されております。一昨年は激しい降雨の中で決行、昨年は参加者全員がゴルフ場に集合するも、またも降雨でプレー不能となりました。雨に縁が深い八松会ゴルフですが、今年は好天を祈っております。

有志による海外旅行は今年で8回目になりますが、10月にオーストラリア、シンガポール行きが決まっております。

(原田守啓記)



を約する姿も多く見られました。区切りの年とあってか、欠席者からも多くの近況報告が寄せられました。

(佐々木正雄記)

■高12回

高12回生は「三五会(昭和35年卒業だから)」と称して、飯田を中心に輪を広げています。今年卒業50年を迎え、11月に記念式典をはじめ関連行事(記念講演・ふるさとめぐ

り・ゴルフコンペ・記念誌発行など)を計画しております。別組織としての、関東在住者の集まりである「東京三五会」は、常任幹事と当番幹事

によって運営されており、年間を通して気楽に集い、楽しく話し合える場として、新年会・お花見・暑気払い・ハイキング・歌おう会・観賞会(絵画・書道・コンサートなど)・旅行会などを随時計画し、多くの会員に参加していただいております。

また、ホームページを立ち



上げ、会員相互の連絡や近況報告、意見交換など、気軽に活用して好評を得ています。

(井伊健夫記)

■高13回

6月28日に、田舎で行われた飯田高校同窓会総会は、我々高13回と高23回が幹事役年次になっていたため、今村健会長ほか、高13回生の昂(すばる)会のメンバーが43名ほど出席しました。

今年10月15・16日は、あららぎカントリークラブでゴルフコンペ、在京同期会は、11月14日の総会後に開催する予定。

また、2011年には、卒業50周年記念一泊旅行が予定されています。(平澤春樹記)

■高14回

昭和37年卒業の私たちは「東京37会」と称して、年に

2回、定期的に集まっています。有志によるゴルフコンペと忘年会です。

今年のゴルフコンペは東京と飯田の中間地点ということで企画し、5月下旬、飯田地元代表の菅沼哲夫君にお願いして、蓼科グランドホテル滝の湯に泊まり、蓼科高原カントリー倶楽部でプレーしました。

宴会では浅田節子さんの安来節で座が一気に盛り上がり、その後一人ひとりの自己紹介、近況報告が始まったのですが、それぞれが人生の円熟期に入っているんだという印象でした。

今回の参加者は、菅沼哲夫、北原弘巳、蒲祐正、浅田節子、川崎修、林泰、堀越美知恵、片桐彦彦、筒井基安、小池惇平の10名でした。

昨年12月の忘年会は、松下博君が幹事長を務めて数寄屋橋の「クルーズクルーズ」で開催、年々集まって来てくれ



る人数が増えているので、幹事一同吃驚しています。この時は44名集まりました。

(林 泰記)

■高15回

高15回生の集い「東地区いちご会」、昨年は開催すること22回目となりました。「東地区」としたのは、在京・京浜地区に限らず、広く東日本の人たちを対象にしたものです。この日程：この場所と、

常に参加者の胸に残るよう、毎年2月の第1土曜日、新宿サンパークで変えることなく開催しております。

参加者は30〜40名くらいですが、飯田はもちろん、遠くは名古屋・静岡からのご参加もあります。

ただ近年は、常連者のご事情で不参加となる一方で、初めての参加・久しぶりといった人たちも多くなってきました。

求めるところは心の拠り所



「飯田高校」の、またそこで生きた時代、青春時代の思い出であり、弾む会話はあつという間に長時間に及んでおります。来年からは午後の早い時間から開催することにした。参加者たちのそれなりの年齢を考えてのことです。

参加者こそ主役！

この会で、大いに思い出の花を咲かそうではありませんか。まだ来ぬあなたも、ぜひご参加を！

(佐々木康夫記)

■高16回

母校で開催された卒業25周年のホームカミングデー以降、30周年、35周年、55歳の修学旅行、40周年、還暦大会、45周年と、3〜5年ごとに大会を開催してきた一六会、来年は65歳大会を熱海・伊豆方面で開催の予定です。

55歳修学旅行に続いて幹事役を引き受けた東京一六会



は、今年の新年会からその準備を始め、秋には詳細が決まる予定。

同窓会のタテのつながりには弱い一六会ですが、横のつながりは強いようです。その準備と称して、今年は飲み会が重なりそうです。

(興津利夫記)

■高21回

私達の在京同期会は「赤石21（ハニー）の会」といいま

す。命名の由来は、高（ハイスクール）の「ハ」に、21の「に」だからです。「ハニー」とは蜂蜜のことをいい、また、恋人や妻への愛の呼び掛けでもあります。つまり、「友愛」の心で共に楽しく生きようという願いがあります。

当会は3年前の、在京飯田高校同窓会総会の幹事を務めたことを契機として組織し、今年の3月5日に第5回目の会を開催しました。

当会はいつもし談論風発の賑やかな雰囲気だ。欲談する一方、全員が夫々これまでの生き様やこだわりを紹介し、互いに「元氣」を交換しています。

仲間の中島光夫君は趣味で、友人並みの絵を描いており、毎年蒼樹展へ出展しています。また北林豊君は長年にわたり全国各地で大正琴のコンサートを開催する琴伝流大正琴の会長をしており、我々を招待してくれます。

来年還暦の私達は絵画展や大正琴コンサートを訪れ、その文化的気分を堪能しています。（大原 直記）

■高22回

卒業25周年記念行事を機に組織化をスタートし、故郷を離れた各地区でも地元の熱意に触発されて組織化の機運が高まった。関東地区は結成されれば最大組織のだが、まとめるのが大変だという欠点も併せ持っていた。三ツ橋史緒子さんという名事務局長を得て、クラス幹事による消息を追う地道な取り組みが始まった。

全体組織「二二会」は1994年3月に発足し、2年半後の1996年10月5日に「関東郷友会22」が産声をあげた。家内からは「怖い人たちの団体の名称みたい」と言われるが、出身中学の地域

別にあつた郷友会を懐かしみ名付けたもので、決して怖くも怪しくもない。

和田良昭会長の下、年1回の総会の他、何かと理由をつけて集ってきた。今後も声を掛け合って、楽しく、未長く続けていきたい。

一昨年は、在京飯田高校同窓会総会の記念事業として「飯田下伊那の方言(改訂版)」を高12回のご指導を得て発行することができた。

卒業30周年は関東郷友会が担当した。今年は40周年、10月31日に飯田で開かれる。

(岩崎廣和記)

■高41回

昨年11月に、卒業生だけでなく20周年同窓会を飯田で開催しました。当日は、地元飯田のみでなく、東京や、遠くは鹿児島などから同窓生が100名ほど集まりました。

昔とあまり変わらないお姿の恩師の畑中先生もお迎えすることもできました。

このような会を盛大に行なうことができたのも、ひとえに地元飯田にいる同窓生の中で、各組から2名ほど選出した実行委員会の皆様のおかげです。事前に何度も集まって計画し、当日も様々な仕事をこなしてくれた彼らの尽力がなかったら、こんな素晴らしい同窓会は開催できなかったと思います。

この同窓会の開催にあたり「大航海時代」飯田高校41回卒」というホームページも立ち上げました。http://maglog.jp/yidai1

卒業して20年ほど経ち、飯田を離れて遠く東京にいても、飯田の同窓生たちと繋がっているような気持ちにしてくれる素晴らしい仲間たちが地元にいることを感謝しています。（岡田妙子記）